

宜野座



宜野座村

GINOZA

宜野座村では、サトウキビをはじめ、いちごやマンゴー、パインアップル、ジャガイモ、菊、観葉植物など様々な農作物が栽培されていますが、特に近年ではベビーリーフやアイスプラントといったエコ野菜に力を入れ「有機の里」として環境に優しい持続性のある農業を推進しています。

また、もずくや車エビといった海の幸も養殖され、その鮮度を活かしたグルメスポットや匠の技がキラリと光る伝統工芸品も有名で多彩なデザインがあります。

アイスプラント

キラキラとした水晶のような粒とプチプチとした食感、ほのかな塩味が特徴。

エコ野菜

県内量販店へ出荷する農業、化学肥料を使わない体に優しい野菜「ベビーリーフ」は人気です。

ジャム

宜野座村はおいしいトロピカルフルーツの産地。とれたてのフルーツを直ぐに荒く刻んで食感と香りが残るように砂糖漬けにしています。沖縄ならではの贅沢な味。



生もずくと手づくりタレ

沖縄の食材として知られるもずくは、低カロリーでミネラルや食物繊維を多く含む健康食材。宜野座のきれいな海で養殖されたものは良質です。手づくりのもずくのタレも好評。

車エビ

宜野座で養殖される車エビは大きいことで知られています。冷凍物は通年出荷されています。

陶器

村内には、「ちな陶房」と「くちや窯」という2つの窯元があります。各窯元の特徴ある色彩とデザインは「未来ぎのざ」でご覧頂けます。



琉球泡盛 宜野座のしずく

地元商工会が、崎山酒造廠と協力し独自にブランド化したお酒。地元の天然水と崎山酒造廠の醸造技術を活かし黒糖酵母を使用することで、より飲み易いやさしい味に仕上げました。

宜野座産 いちご

栽培しているのは、果肉がやわらかく香り高い「かおり」と甘みと酸味のバランスが良い「さちのか」の2品種。いちご狩りも人気で、1月～5月頃まで楽しめます。

昔ながらの懐かしい味 宜野座のお菓子

いちゃがりがり・砂糖粉菓子・塩せんべい。沖縄の子供たちが昔から口にしているお菓子は、実は宜野座村でつくられています。



県拠点産地認定 マンゴー

宜野座村はマンゴーの作付面積が県内三番目。地形を活かした栽培方法で、太陽をいっぱいにあびたマンゴーは、糖度が高く美味しいと評判です。2013年には県の拠点産地にも認定されました。



じゃがめん

県内を代表するじゃがいもの産地でもある宜野座村が村おこしに繋げようと開発した麺。沖縄そばに蒸してつぶしたじゃがいもを練り込んだ麺は、歯ごたえとぶちぶちとした食感が人気。



沖縄のお茶発祥の地 宜野座のお茶

宜野座村は、沖縄のお茶発祥の地。琉球におけるお茶の栽培は、現在の宜野座村漢那に栽植したことに始まると言われています。



三線

沖縄の民謡、古典音楽には欠かせない楽器。手づくりで丁寧に作られたその音色は素朴で温かみがあります。



沖縄県無形民俗文化財

宜野座の京太郎

「京太郎」とは首里の安仁屋村に居住し、沖縄本島内各地の家々をまわって祝儀には万歳を奏して余興として踊りや人形芝居を演じ、法事には念仏を唱えたり念仏歌を歌うなど、門付芸をなりわいとした人々のことです。

この京太郎による芸は、廃藩置県後に首里に開かれた寒水川芝居などにおいて舞台芸能の演目として再構成され、さかんに上演されました。

「宜野座の京太郎」は、一時期寒水川芝居に身を置いていた渡具知武恭が宜野座に設けた芝居小屋で演じて紹介され、1900（明治33）年の八月あしびで村の若者たちによって演じられたのが始まりとされています。

以来、100年以上にわたり上演されてきた宜野座の京太郎は、1985（昭和60）年には沖縄県指定無形民俗文化財となりました。



歴史を継承し 文化を創造する村



ミジタヤー(村指定無形民俗文化財)

男性4人、女性4人による群舞形式の手踊りで、「ミジタヤー」は「めでたや」の転訛とされており一説には王府時代に首里の役人が村を訪れた際、歓待のために踊られたといわれています。近隣他地域には類例のない踊りで、音曲も独自のものが用いられます。

村芝居の開催が不定期となった現在では、祝い事や諸行事の場で踊られる程度となっていて、上演の機会が少ない貴重な芸能です。

1996年（平成8）4月には宜野座村指定無形民俗文化財となりました。



本部大主(ムトウブウフヌシ)

組踊「本部大主」は、琉球王朝統一以前の群雄割拠の時代を舞台とした仇討物で、封建時代の作品らしく儒教道徳の影響を強く受けたいわゆる勧善懲悪の内容となっています。全7景からなる長編で上演時間は約2時間に及び、音曲には歌三線や太鼓を始め、ガク（チャルメラ）、カニ（鉦）、ブラ（法螺貝）を用います。

松田区には1818年（嘉慶23）に筆写された「本部大主」などの組踊台本が現存し、宜野座村指定有形民俗文化財となっていて、この資料から松田の組踊が約200年の歴史を有すると考えられています。



長者の大主(チョウジャノウフヌシ)

長者の大主は漢那では古くから演じられていたそうですが、明治後期に一旦中断し、1914年（大正3）に復活しました。もとは長者とその息子であるチクルン（筑登之）、パーチン（親雲上）の3人で演じられていましたが、役者が少なく寂しいとして1929年（昭和4）以降はこれに孫2人を加え5人となりました。



宜野座の伝統芸能



宜野座村立博物館

☎098-968-4378

住/宜野座村字宜野座232 駐/有り
 営/9:00~16:30 ※12:00~13:00は昼休み
 休/毎週月曜・祝日・年末年始(12/29~1/3)

昭和20年(1945年)の沖縄戦時、本村は本島中南部と異なり戦場にはなりませんでしたが、戦争の数年前から食糧増産を目的とした開拓集落が高松・福山・城原につくられ、米軍占領後には民間人の収容地域となったため、約10万3千名の方々が本村で生活をしていました。



宜野座村を知る

本村は、古知屋岳・ガランマン岳・漢那岳が北風を防ぎ、海岸のイノーが漁場となっており、縄文時代から水場を掘り所に人々が生活していました。

琉球王府時代になると、古知屋(現:松田)・宜野座・惣慶・漢那の集落が形成されますが、各集落には現在も祖先が眠る聖域である御嶽が残っています。明治の頃には、首里・那覇・泊の土族が古知屋や宜野座に寄留し、組踊「本部大王」や「宜野座の京太郎(県無形民俗文化財)」など土族の文化であった芸能を伝え、五穀豊穡を神に祈願する豊年祭(八月あしび)に取り入れられています。現在まで継承されています。

このように、本村には縄文時代から現代の歴史を語る自然・考古・民俗・芸能・沖縄戦など数多くの文化財が残されており、これらを分かりやすく宜野座村立博物館で展示紹介しています。

数多い展示の中でも、遺跡から出土したオキナワウラジロガシ(前原遺跡)は、縄文時代の食生活を考える上で貴重。県内でも数少ない木製家型墓(漢那ウエーヌアタイ)も展示しています。また、本村の伝説や沖縄戦時の様子などを題材にした紙芝居は、大人から子どもまで人気があります。



松田の馬場及び松並木(村指定文化財 史跡)

松田小学校には、明治の頃に首里から寄留した「ティーラタンメー」が造り、古知屋(現在の松田)の人々が草競馬を楽しんだという「松田の馬場及び松並木」があります。同馬場は全長250メートル、幅25メートルで、左右に松を植林して見物場が設けられていました。現在、松並木は美しい景観をつくっています。



惣慶の石敢當(安部岳の返し)

字惣慶の古い集落境には、石敢當(イシガントウ)と呼ばれる石獅子が東西北に配置されています。惣慶では、恩納岳・久志岳・安部崎の方向から吹く風が災いを運んでくると考えられていたため、厄除けの目的で集落の入口にイシガントウを置いたと伝えられています。



漢那ウエーヌアタイ

漢那集落の東にある森は、ウエーヌアタイ(俗称:ヨリアゲの森公園)と呼ばれ、石灰岩地帯と非石灰岩地帯の異なる環境で生育する植物が分布する貴重な森となっています。

また、県内で最大規模といわれるアマミアラカン群落を有し、11~12月頃になるとアマミアラカンの実(ドングリ)が拾えます。

なお、発掘調査ではグスク時代に鍛冶場が営まれていた事が確認されており、森の洞穴には琉球王府の御用木として位置づけられていたチャーギ(和名:イヌマキ)で造られた木製家型墓も残っていました。